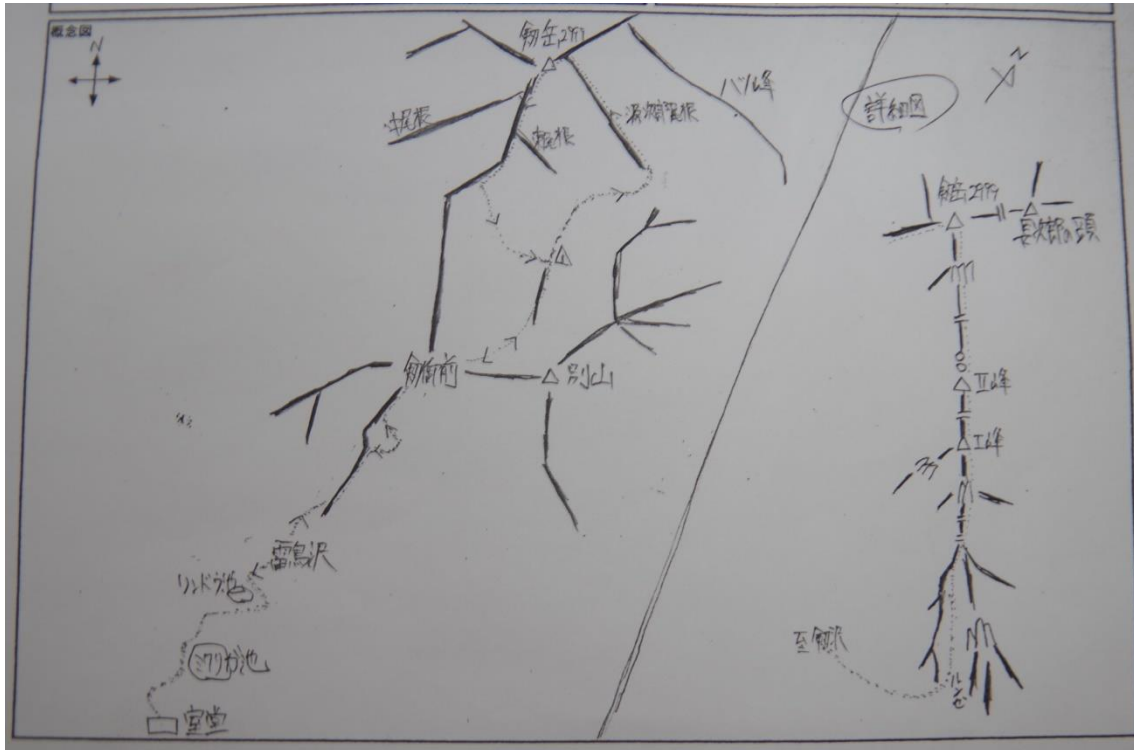


## 劔岳・源次郎尾根

平成 29 年 5 月 20・21 日

メンバー：草田、非会員 1 名（父・L）



劔岳——。それは私が人生で初めて敗退を余儀なくされた山である。

2 年前の夏の暮れ。池ノ平小屋に着く頃には、雨脚が強くなっていた。空は分厚い雲が世界を覆い、一晩中絶え間なくテントを叩きつける。翌朝、微かに感じる太陽の気配に、僅かな希望を願って外へ出ても、兆しすら感じることはできなかった。当時はまだ力不足だった私は、父・弟とともに、後ろ髪を引かれながら、来た道に戻ったのである。

それから 2 年弱。ようやくリベンジの機会が訪れた。本当は北方稜線を赤谷尾根から完全にリベンジしたかったのだが、GW に行った人々の情報を集めるとどうやら馬場島からの 3 ルートは、この 2 週間ですっかり夏モードに切り替わったらしい。なので、気持ちを切り替えてより上級者コースである源次郎尾根へ、共に敗退した父と挑むことにした。

1 日目

前日、実家のある神奈川に泊まり、翌朝5:00に出発した。今日は剣沢の幕営地までだからのんびりできる、なんて2人とも油断をしていたので、予定より1時間遅れでの出発。しょうもない親子だ。しかしそこからはスムーズで、乗り継ぎもスイスイと進み、あっという間に室堂へ。観光客でごった返す駅をかき分けるように外へ出た。



地上にも大勢の観光客がいたが、5分も歩けば人はまばらになった。登山客の7割程度は雄山へと向かう。時々豆粒のような行列を振り返りながら、私たちは雷鳥沢へと下りていく。

スキーヤーのシュプールが山肌に美しく映える。緩斜面なので私でも滑れそう。とても気持ちよさそうに滑る彼らに嫉妬しながら、雷鳥沢でアイゼンを履いた。

ここから剣御前へ向けて本格的な登りとなる。夏道だとクネクネゴロゴロ歩きにくい、雪がたっぷりある今日は、いつもよりも歩きやすい。トレースを時々踏み抜きながらも、ゆっくりと一步一步直登して行く。背面から照り付ける真夏のような太陽に苦しみながらも、100分かけてようやく剣御前に着いた。眼前にはようやく姿を現した霊峰。青空の下、凛々しくそびえ立つその姿は、まさにロマンの塊であった。



剣沢幕営地に着くと、1箇所だけ地面が露出している場所があった。3張程度は張れただろう。まだ誰もいなかった幕営地に、一番乗りでテントを張る。谷間を穏やかに吹き抜ける風が、火照った心地よい。少しばかり休憩したのち、時間もあるので空荷で偵察へ向かった。

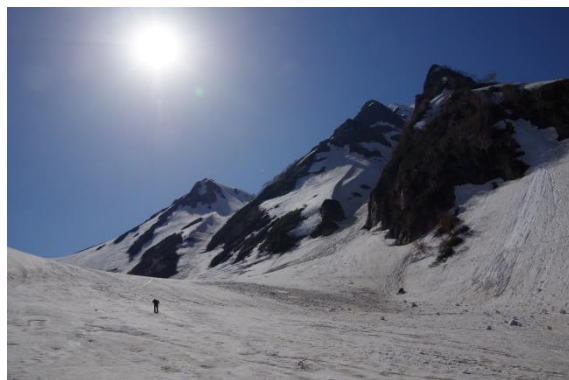
剣沢の小屋を右手に下りて間もなくすると、明日挑む強敵が見えてくる。切り立つようにそびえるⅠ・Ⅱ峰。しっかり調べてきたはずなのに、いざ本物を目の前にすると少しばかり足が竦む。あそこを登るのか。身体中に興奮と不安が駆け巡る。

私たちは40分かけて、腐った雪に手こずりながら取付のルンゼまで行った。帰りの足取りは、雪のせいなのか、焼けるような暑さ



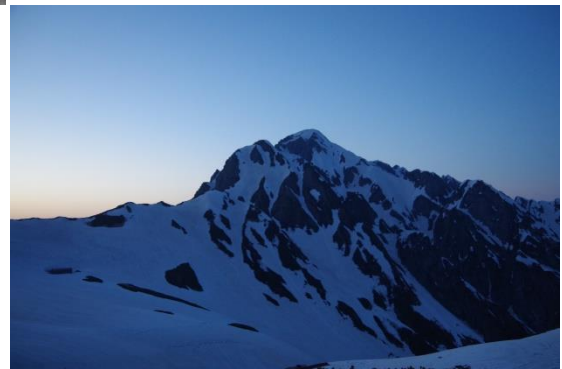
のせいなのか、或いは背後から感じる明日の敵のオーラのせいなのか分からないが、とても重かった。

早めの夕飯を食べ終わると、父はあっという間に寝た。私はまだ明るかったので、本を読んでいた。幕営地には私たちのほかに3パーティーが、各々の時間を楽しんで



いた。そうして世界から色彩が失われた頃、皆眠りについた。静かな谷間に響くのは、蛙に似た主たちの鳴き声だけだった。

- 10 : 25 室堂
- 11 : 00 雷鳥沢
- 13 : 00 剣御前
- 13 : 25 剣沢幕営地 (着)
- 14 : 15 剣沢幕営地 (発)
- 14 : 50 ルンゼ取付
- 16 : 05 剣沢幕営地



## 2日目

まだ満天の星がさんざめく頃、幕営地に朝が来た。ヨーイどん。渋滞を避けるための静かなる号砲が鳴り響く。瞬く間に駆け下りて行った若者3人のパーティーを横目に、私た







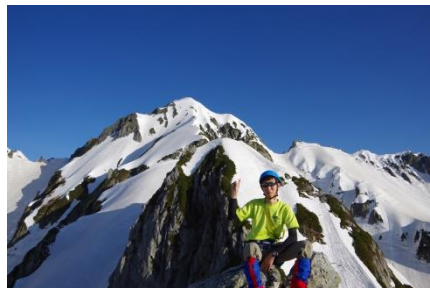
ちはゆっくりと剣沢を下りて行った。

取付に着いた頃には、もう山の端から光が漏れていた。さっきまで降っていた星たちは、1つだけを残してもうすっかり消えてしまった。サクサクとアイゼンが刺さる音だけが谷間に木霊する。私たちは先行する2パーティーの後ろをゆっくりと進んでいった。

ルンゼは途中で2つに分かれる。みんな左を詰めていく。所々にあるクレバスを避けながら、一步一步丁寧に踏みしめていく。父の息遣いが荒い。それでも呼吸を整えながら眺める景色は、常に新鮮だ。ルンゼの末端に着いた頃には、世界に色彩が戻っていた。

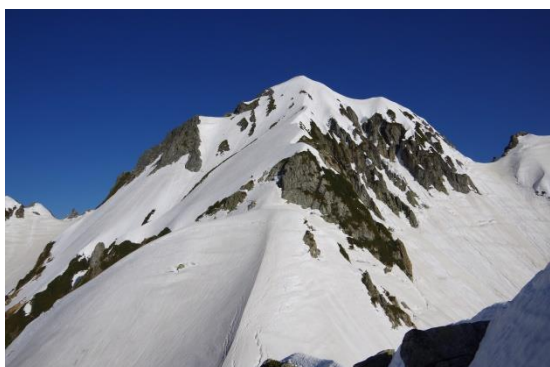


末端からI峰まではそこまで危ない箇所はなかった。しかし、アンザイレンで歩みを進める。岩と雪の殿堂——。誰かがそんなことを言っていたが、これほどその名にふさわしい尾根があるだろうか。アイゼンを履いたまま岩と雪を交互に登っていくと、I峰に着いた。雷鳥の糞が、そこら中であつた。なんとも贅沢な厠だ。



ナイフリッジを慎重に下り、II峰へ向かう。II峰への登り返しは岩場だが、特段難しい岩場ではない。丁寧に登り、10分程度で通過をした。太陽はもう既に僕らを照らしているが、まだ暑





さは感じない。あっという間にⅡ峰を踏んだ。

少しだけ休んで、リッジを恐る恐る下っていく。今日一番の緊張感。身体中からドーパミンが分泌される。こういうのをクライマーズ・ハイと呼ぶのだろうか。疲れもさほど感じていない。そんなことを考えていると、懸垂下降のポイントに辿り着いた。本日のメイン

ディッシュである。ロープにATCを通して、少しずつ下りていく。手袋をし忘れたので、摩擦で手が熱い。途中、ポケットに入れていた飴玉が勢いよく落ちていった。白と青の世界に、様々な色が生まれる。光に照らされ、微かに光る。綺麗だ。そんなものを眺めながら、私も散らばった飴玉の高さまで下りた。1ピッチで下りきれ程度の高さであったが、十分に楽しめた。核心部を越えた。

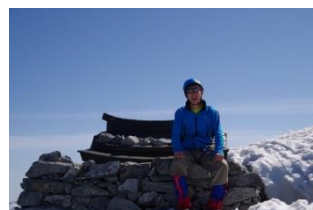


あとはただひたすらに登るだけである。3人組のガイドパーティーを追い抜く。キックステップが斜面に響く。飛行機雲が南へ向かって伸びていく。あと少し。そのあと少しが恐ろしいほどに長い。それでもようやく山頂へたどり着いた。それは、いつも会社に着く頃とほとんど同じ時刻だった。



山頂は賑やかだった。長次郎谷や平蔵谷から登ってくる人々も多かった。やっぱり日曜日だ。それも山日和の日曜日。ああ、すっとこのまま山頂にいたい——。そう思わせるような清々しい晴天だった。風は多少あったものの、日差しが強いので寒くはない。日向ぼっこしていれば、それだけで満たされた。

でも、この瞬間にも刻々と雪が融けていく。私たちは名残惜しみながら、予定を変更して平蔵谷を駆け降りていった。漫然と重力に従って、スボリズボリと足が雪に埋もれていく。風が吹かない谷間は暑い。うなじが黒く焦げ付いている。何かから逃れるように、私たちは無我夢中で平蔵谷出合へと下りて行っ





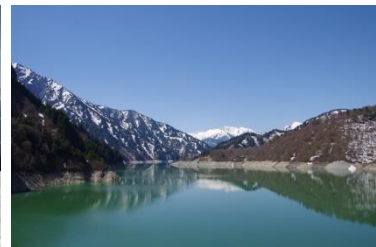


た。あとは劔御前までの長い長い登り返しを残すだけとなった。

雷鳥沢からの登り返しは、うだるような暑さが私たちを襲った。雪から冷たさは全く感じない。横切るツアーの中国人たちが、物珍しそうに私たちを見つめた。露出した石畳にアイゼンの音が響き渡る。力尽きて室堂に着いた頃には、背中

の水は空っぽだった。普段水を飲まない私が、そんな事態に陥ったのは初めてだった。

- 3:50 劔沢幕营地
- 4:15 ルンゼ取付
- 5:05 ルンゼ末端
- 6:00 I 峰
- 6:55 II 峰
- 8:05 劔岳山頂
- 9:20 平蔵谷出合
- 10:25 劔沢幕营地 (着)
- 11:40 劔沢幕营地
- 12:25 劔御前
- 13:05 雷鳥沢
- 14:05 室堂



天候が良く、霊峰に導かれた山行だったのだろう。念入りに準備をしていたせいもあるのか、源次郎尾根自体の難易度はそこまで高いと感じなかった。きちんと挑めば、過度に恐れる必要はないだろう。眺望もいいし、登り応えのある楽しい尾根である。

それよりも劔沢や雷鳥沢の登り返しのほうが、よっぽどキツかった。風の見えない灼熱の谷間を、雪と幕営一式を背負って登っていく。そっちの方が精神的にも肉体的にもかなり蝕まれた。

ただ、この時季の山は天気も安定していて、しかも静かなのでオススメだ。ぜひ機会があれば、一度は足を運んでほしい。後悔することは、まずないだろう。